

第3期長井市教育振興計画（案）についての意見募集の結果について

「第3期長井市教育振興計画（案）」について、市民の皆様から御意見を募集したところ、下記のとおりご意見をいただきました。貴重なご意見をありがとうございました。

記

1 意見の募集期間

令和5年12月7日木曜日から12月25日月曜日まで

2 提出された意見・提言の件数

12件

3 意見・提言の内容及び意見に対する市の考え方

No.	項 目	意見の内容	市の考え方
1	第4章 目標1 基本施策1 子供たちが笑顔 で楽しく過ごせ る学びの場づく り（P10）	一人ひとりの個性や多様性が認められる安心感の学び場が不可欠であることに賛同します。 一方で現状の、特に中学校をみると、校則などの縛りで多様性が認められにくい状況になっていることを感じています。 社会はルールベースで動かす必要があることは、なるべく早い段階で深く理解しておく必要はあると考え、一定の校則など必要であることは理解します。ただし、「ルールは必要だけれど、変えられる」という認識も同時に子ども達に深く根付いてほしいと願います。 自分たちが欲しい社会を作りながら、その社会が暴走しないよう、社会をまとめながらルールを作る練習は、失敗を繰り返しながら、学級単位、学校単位などで早いうちから経験しておく価値が大いにあると考えます。そうした経験はのちに、選挙に行き、自分たちの	ご意見としてお受けし、具体的な取り組みの参考とさせていただきます。

		コミュニティを自分たちで作ってあげていく意識づくりにも役立つと考えています。 今まで通りの校則をそのまま守ることや、先生の指示通りに動くことだけでなく、自分たちで、自分自身と同様に周りのことを尊重しあい、ルールをつくるマインドを育む時間が確保されることを希望します。 また、多様性を知るということは公教育に求められている最も重大なことのひとつであると捉えています。 社会はいろんな人がいるからこそ、面白いことが起こる、価値があるということを、そういった活動から学べる場であってほしいと願います。
2	第4章 目標3 基本施策4 多様な活動とつながりが生まれる学びの推進 (P11)	学力と同様、もしくはそれ以上に学生時代に身につけてほしいことは、自分の好きなことを見つけることだと考えています。 自分の好きなことをきわめると同時に、その内容を自分以外の人と共有し、自分以外の視点での発見を共有できる場を公教育の中でもつことができることを希望します。 人とのやり取りの中で重要な、多角的視点は、さまざまな人がいるところでこそ育つと考えています。それは、ダイバーシティとの表裏である面であり、多様性を育む公教育において、子どもたち一人ひとりの探究を共有しあい、そこでそれぞれの興味関心から湧き起こる対話を育む授業があることが、さらに望ましいと考えています。

		学校の仲間の意見に触れ、また、地域からの大人の方々など多くの人の姿や見方に触れ、学び続けることの楽しさを体得してほしいと願います。 公教育でその時間を確保できない場合、公教育の外でもそのような時間と場所を子ども達に確保、提供されるよう望みます。	
3	第4章 目標1 基本施策1 (1) 夢を実現する力の育成 ①確かな学力の育成 (P12)	自分の思いを言語化する力を育む教育を求めています。 自分の中に湧き起こる問いや気づきを言語化し、仲間と共有し育んでいくこと、その中でおこる変化を楽しめるマインドは、世界に挑戦していく力になると考えています。 すでに、AIは言語で操作できる段階にきています。今までの大人が、困った時にその分野の詳しい知人友人を頼り、様々な問題を乗り越えてきたように、これからの子ども達はAIを仲間として困難を乗り越えていくことと予測されます。人間関係においても強すぎる依存関係が望ましくないのと同様に、対AIにおいても同様に適切な距離感を保てるようなリテラシー、コンピテンシーを身につけ、時代を楽しみながら切り拓く力を育成していただけると幸いです。	
4	第4章 目標1 基本施策1 (1) 夢を実現する力の育成 ①確かな学力の育成 (P12)	学ぶ意欲はあっても、学習障害や理解力の個人差などにより、これまでのような正解が決まっている問題を解くような授業などではなかなか学力が身につかない子どもも一定数いると思います。学習の遅れが不登校の数ある一因のひとつでもあり、自己肯定感や学習意欲の低下は将来にわたり子どもの心や社会	

		性に影響を及ぼすのではないかと危惧しています。 例えば算数なら、計算式にたどり着くまでの過程をより丁寧に時間をかけるなど探究学習によって、不登校でなくても勉強に苦手感を持っている子も意欲的に学べるようになるのではないのでしょうか。 可能であれば、長井市全体の中で“探究的な学び”にシフトした公立学校（できれば小中一貫校）が一つでもあって欲しいと思います。教科書に沿ってカリキュラムを網羅するよりも、ゆったりと学びを進める環境において結果的に学力が伸びたという事例も他の地域の公立学校でも報告されているようです。
5	第4章 目標1 基本施策1 （2）多様性の尊重と特別支援教育の推進 ②一人ひとりのニーズに寄り添う支援の充実 (P16)	現在、子どもを適応指導教室（ほつとなるスクール）に通所させて頂いております。 支援員の先生、子どもの目線に立った寄り添いに安心して通所できるようになった生徒も多くいると感じています。面談などを通じた家庭へのケアと学校とのやり取り等、保護者にとっても非常に心強い存在となっています。 不登校児童の増加に伴い、このような家庭でも学校でもない“第3の居場所”の利用希望者が今後も増えていくと予想されます。現在の、支援員とサポートの先生2名だけで子どもと家庭のケアを受け持つのは非常に厳しい状況が予想されますので、人員の補充が必要だと感じています。（正規の支援員の配置が難しいのであれば、保護者などによるボランティアスタッフを充てるなどの臨時対応でも良いかと思えます。）

		また、活動場所を今現在の場所（まご〜れの跡地）に固定するか、もしくは通年通して落ち着いて活動できる専用の場所が設けられることを望みます。 ※増員につきまして、困りごとを抱えた子どもへの対応になりますので、ある程度の研修が必要ではないかと思います。子育て支援課で開催している「ペアレントプログラム（認知行動療法のワーク）」は幼稚園教諭の先生方も受講している研修ですし、多様な学びの場で支援員として関わる人材の研修としてもっと広く活用されたら良いのではないかと思います。
6	第4章 目標1 基本施策1 （4）心と体の健やかな成長の推進（P18）	小学校に関してですが、現状の学校主導の生活リズムづくりの活動に関して、多様性を認め合う社会において、一定の「望ましい生活リズム」を学校側が提案していることに違和感を覚えています。各家庭で話し合い、それぞれの理想の生活リズムをそれぞれが作り、そのリズムを守るような活動になることを望みます。
7	第4章 目標1 基本施策1 （4）心と体の健やかな成長の推進（P18） 第4章 目標2 基本施策3 （3）家庭と地域の教育力の向上 ①家庭教育の充実（P26）	学齢期の子どもとゲームやメディアとの付き合い方は家庭でも頭の痛い問題ですが、過度なアウトメディアなどのプレッシャーは、（むしろ）真面目な親やゲームやメディアにしか心の逃げ場のない子どもたちを更に追い詰める側面もあると思います。 「ゲームは心の浮き輪」という言葉があるとおりに、強制的に取り上げることは、親子にとって深刻なケースに発展する可能性もあります。 ゲーム好きとゲーム依存の違いを理解し、親子のコミュニケーション

		がきちんととれている子どもはゲーム依存にならないという専門家の意見なども保護者に説明する機会があれば、親の不安や不登校の子どもたちへの偏見も軽減されるのではと思います。 子どもがゲームやメディアの時間をなかなかコントロールできない状態だとしても、その事実を本人が受け止め、自らコントロールできるようになるまでを大人たちは見守るという余裕があれば、メディアコントロールも子どもたちにとって課題や学びとなり、大切な成長の過程だと、親もおおらかな気持ちで子育てができるのではないかと思います。 そういった取り組み自体が探究の課題であり、「宿題」という家庭での学びと位置付けても良いのではないのでしょうか。 メディアコントロールに取り組む主体はあくまで子ども本人であり、親はその過程を見守る存在であればいいと思います。その視点は、学校での先生と生徒の関係でも言えることだと思いますが、数値だけでコントロールするのではなく、子どもの個性を大切に、親や先生方、それぞれの精神的負担を減らす取り組みは、「一人ひとりのウェルビーイング」にもつながるのではないかと思います。
8	第4章 目標1 基本施策1 (5)教職員研修の充実と指導力の向上 (P19)	今までの、何かを与え、指導するスタイルから、子ども達の才能を見出すファシリテーターとしての教職員の存在を求めています。 一方で、上記のような要求を学校と調整する際、現場の教職員の方々は、子ども達と向き合う以外の業務

		に手を奪われてしまうことが多いと聞きます。 教職員の方々が、子ども達を見守り、寄り添い、共感する時間を確保できるような学校運営、働き方になることも希望しています。
9	第4章 目標2 基本施策3 (2)地域と学校の共同活動の充実 (P25)	ほっとなるスクール（適応指導教室）は現在、「学校へ行けない子どもが安心して居られる」という重要な居場所だと思います。しかし、勉強面でのサポートや自然の中で身体を動かしたり共同作業をしたりする体験をすることなどはできません。元気になってきたけれどまだ学校へは行けない状態の不登校の子どもたちの活動する場所が、ほっとなるスクール以外にも、地域住民による多様な居場所が作られたらいいと思います。 コミセンや学校の空き教室、または民間施設などの場所の提供や、見守りをする支援員は希望があれば有償ボランティアといった形などの行政支援があれば、意欲のある市民の方々の活用にもなり、教職員の人材不足などにも様々な形で対応できるのではないのでしょうか。 支援員は講習※を受ける義務付けなどをすれば、子どもたちにとっても安心して活動できる学びの場になるでしょうし、情報共有等で行政との連携も取りやすいのではと思います。 ※不登校の子どもの居場所を見守る指導員の養成としても、「ペアレントプログラム」はとても良い研修（講習）ではないかと思います。
10	第4章 目標3 基本施策4	中高生のクリエイティビティが解放され、育っていく環境、講習などが多く提供されることを望みます。

	(1) 次世代を担う青少年の健全育成 (P29)	学校以外の場所で、親や教職員以外の大人と接する機会をもてる現状に感謝しています。 そうした機会を利用し、人との関わりの中で、課題と価値を察知する力や、そもそもの価値を生み出す力を育んでほしいと願います。また、その機会が、それを望む全ての青少年に届いてほしいと願います。
11	第4章 目標3 基本施策4 (2) 多様な生涯学習活動の推進 (P30)	教職員を含む大人たちが、人はいつまでも学び続けることができ、そこに人生の大きな楽しみがあることを、子ども達に示せるような社会を築いていきたいと考えています。 大人が夢中になることに子ども達が巻き込まれ、また一方で、子ども達の姿に大人達も巻き込まれるような社会であってほしいと願います。 大人も子どもも隔てなく、共に学び、育つ姿勢を持ち続けられる人が育つ社会であってほしいと願います。
12	その他	日頃、長井市の学校と教育にご尽力いただく全ての皆様に感謝しています。 また、長井市の公立小中学校で、学校、教室に行かない選択をしている子達の居場所、見守りの体制などが整備され始めていることにも感謝しています。 同時に、学校に通いながら、その枠から少し外れる子どもたち、また、その枠を窮屈に感じている子ども達も安心した居場所を見つけ、学校以外の場所でも学びつづけられる環境を見つけられることを望んでいます。 子ども達は、常に胸に多くの問いを抱えていると感じています。その問

	いを抱き、向き合うからこそ今後の社会を生き抜いていくのに必要な力であり、学校、家庭、地域と力を合わせ、大切に育んでいきたいと考えています。 それぞれの思いを共有できる場、その思いを受け止めてもらえる安心できる場の選択肢が子ども達に増えるようなサポートが続くことを望んでいます。	
--	--	--

4 問い合わせ先

長井市教育委員会教育総務課

住 所 〒993-8601 長井市栄町1-1

電 話 0238-82-8022

FAX 0238-87-3368

メール kyouiku@city.nagai.yamagata.jp

5 公表資料及び公表場所

(1) 公表資料 第3期長井市教育振興計画（案）

(2) 公表場所 市ホームページ、長井市教育委員会教育総務課